

感するのは、野生動物保全・管理を実際に勧めるためには、「いい研究」だけでは不十分であり、現地の人との信頼関係の厚さ、それを培うための人柄、そして現場を知るものだけが持つ言葉の力強さ、これらがあってこそ初めて可能になるものだという事だろう。本書の著者が、こうした魅力を全て兼ねそろえていることも、読めばすぐに分かる。もっとも、著者が近寄りがたいスーパーマンであるとはいいたくないわけではない。著者の研究活動の原動力は、動物が好き、サバが好きという純粋な感情にあること、その原動力さえ維持すれば、おのずと結果が付いてくることを同時に本書は教えてくれるからだ。その意味で、本書は勇気をくれる書物でもある。

残念ながら、本書には、野生動物の減少・絶滅という世界規模で進行する難題にどう取り組んでいくべきなのかについての理論的な枠組みが提示されているわけではない。もちろん、本書にそうした内容を求めるのは筋違いなことだが、徹底して現場に立ち続ける著者だからこそ、先進国の野生動物管理と熱帯地域のそれは何がどのように異なるのか、熱帯地域に特有のアプローチがあるのかなのかについても理論立てて論じてほしいと思う。おそらく東南熱帯での経験が誰よりも豊富な著者は、すでにこれらに対しても答えをお持ちのはずだ。これらの点については、次の著作を楽しみにしたいと思う。

(中島啓裕・日本大学生物資源科学部)

宮脇千絵. 『装いの民族誌——中国雲南省
モンの「民族衣装」をめぐる実践』風響社,
2017, 372p.

本書は、2007年1月～2009年3月に中国雲南省文山壮族苗族自治州（以下、文山州）文山県で行った長期調査に基づいている。中国政府が公認する55の少数民族の一つであるミャオ族を対象とし、なかでもモン（Hmong）を自称する人びとの民族衣装をテーマとした民族誌である。民族衣装は伝統的、不変的なものとして捉えられる傾向があるが、著者はめまぐるしく変化するモン女性の衣装に着

目し、その変化の内実と諸要因を明らかにした。

本書を開いてまず目を引くのが、モンの民族衣装を写した約350枚ものカラー写真である。なかでも圧巻なのは、調査地の一モン世帯に属する女性3名の民族衣装、計233点の写真を製作年等の情報とともに整理している（口絵pp.16-53）。これらの写真から、モン女性の3世代にわたる衣装の変遷を確認することができる。衣装の撮影と並行して、サイズ・重量の測定と材料の同定も行った。また、確認するのが困難な衣装の製作年については、プリントアウトした衣装の写真をモン女性たちに見せながら、製作時の記憶をたどっていったと言う（pp.145-146）。著者によるモンの衣装への深い理解に基づき、忍耐強くそして真摯に衣装の変化の様相を捉えた点が、本書の第一のオリジナリティではないだろうか。もう一つの特徴は、衣装の変化をモンのサブ・グループ間関係を踏まえて分析した点である。文山県で人口の多いモン・スーが居住するK村と、モン・ジュアが居住するH村にて実施した調査から、門外漢では見過ごしてしまうサブ・グループ間の相互作用により生じた装いの変化を明らかにした。

著者自身が述べるように、雲南省文山県のモンの事例は、これまであまり記述されてこなかった民族衣装に内在する生き生きとした変化の過程を示すことを可能にしている（p.16）。一方で、本書が扱うのは民族衣装の変化の側面にとどまらない。第5章では、モン自身が変化を拒んでいる死装束の材料（大麻）についても述べている。本書は、モン女性による装うという日々の実践を、彼女たちの選択と規範を中心に、衣装の材料・技術の変遷、さらには生業の変化とサブ・グループ間関係を踏まえて明らかにしている。以下、各章の内容を詳しく見ていく。

西洋由来の概念であるファッションに関する先行研究は、非西洋の伝統的な衣服（民族衣装）を固定的なもの、不変のものとして捉えてきた。それに対し序論では、民族衣装をめぐる近年の動きを、先行研究に基づき整理している。まず、非西洋出身のファッション・デザイナーの出現に着目し、彼らが自身の民族衣装を改変することで、西洋のファッション・シーンに新風を吹き込んだこ

とを例示している。その一方で、外部の人びとが、消滅しつつある民族衣装を救済する取り組みも見られる。著者は、いずれの取り組みも、民族衣装を着用者の社会的文脈から切り離すことで成り立っていると指摘する (pp.19-21)。他方、中国という文脈においては、1949年以來、民族衣装とは漢族以外（すなわち、少数民族）の衣装を指す。ここでは、民族間の境界線を示す指標、ないし外側からの自他認識の指標としての民族衣装が浮き彫りになる。これに関連して、既製服を対象とした現代ファッション論が個人間の差異に注目するのに対し、民族衣装を対象とした研究は民族間の差異ばかりを強調してきた (pp.28-29)。以上の先行研究に対して本書が目指すのは、モンの視点から民族衣装の変化と継承を捉えることである。同時に、民族の差異がそのまま衣装の差異として表出するといった外側の便宜にそくした前提を一旦離れ、モンにおける自他認識と衣装との関連性を捉えなおすことを目的としている。

第1章では、中国内外に居住するモンに関する先行研究を概観している。本書のテーマとかかわりの深い点を取り上げると、調査地である文山州のモン内には自称の異なる7つのサブ・グループがある。サブ・グループが異なっているにもかかわらず、より厳密には言語的類似性から①モン・ベイ、モン・ボア、モン・ソウ、②モン・ジュア、モン・スー、③モン・ドウ、④モン・スアの4つに分けることができる (p.56)。

第2章では、ミャオ（苗）族をはじめとした辺境民族のサブ・グループと民族衣装が、中央政府によっていかに結びつけられてきたのかを、漢籍史料をひもときながら明らかにした。民国期以降には、衣装の色に着目することによって、ミャオ族を5つ（紅・青・白・黒・花）に分類する手法が普及した (p.97)。この分類に基づくと、雲南省には青ミャオ・白ミャオ・花ミャオが居住していることになるが、新中国以降に編纂された地方誌では、雲南省のモンを同様の方法でさらに5つに分類している (pp.105-117)。つまり、地方誌をはじめとした中国語文献においては、統一した分類基準がないまま、またミャオ族（ないしモン）自身の自他認識が参照されないまま、衣装の色に

よって分類するという手法だけが浸透している。

第3章では、冒頭でも述べたモン・ジュア居住村（H村）のX家に属する3世代の女性（調査時、おおよそ70歳代後半、30歳代後半、10歳代後半）が所有する全ての衣装から、その色・材料・技法・図案の変遷を示した。これらの衣装を時系列に並べると、1980年代以降、大麻に代わって棉が普及し、その後は化繊を筆頭に材料が多様化したことがわかる。これに伴い、2000年代以降、衣装の色は年々変化するようになった。同時に、毛糸、刺繍テープ等が流通するようになったことで、装飾の変化にも拍車がかかった。これらの変化は、かつての衣装製作における手仕事の工程を省く変化でもあり、染織やスカートのブリーツ加工等も行われなくなった。そのかわり、モンの女性たちは既製の衣装を定期市で購入するようになったのである。

第4章では、この既製の民族衣装を製作・販売する服飾工場Jを取り上げ、モンの女性にむけて最新の衣装を送り出す人びとに光をあてている。調査地の定期市には、モンの衣装やパーツ、材料を販売する露店・店舗だけが立ち並ぶ、200mほどの路地がある。ここでしのぎを削る販売者たちは、競合者に真似されないように、次々と新しいものを作成しなければならない (pp.195, 198)。このようにモンの衣装の変化を生み出しているのは、既製衣装の製作と販売に携わるモンの女性たちである。一方で、布地や服飾小物の流通に従事している漢族商人も、モンの衣装の流行に影響を与える一アクターとして無視できない。さらに、工場Jは1991年の設立より、アメリカ、ベトナム、ラオスのモンへと販路を広げており、シルク・スクリーンの布や衣装一式のセット販売など、国外向けの販売にあたって考案した新しい製造工程や販売形式を、2008年からはじめたモン向けの既製衣装の販売でも活用している (pp.204-206)。

第5章では、材料が年々変化する民族衣装とは反対に、いまだ大麻によって作られているモンの死装束について述べている。1980年代以降、大麻で民族衣装を製作することはほとんどなくなった。その栽培と染織が重労働で、現在の主たる生業との両立が難しくなったからである。しかし、モン

の死装束に限っては、死者の魂が無事に祖先のいる場所までたどりつくために、大麻で作らなければならない。モンの人びとは死者の身体とともに腐敗していく大麻の性質を重視しているからである (p.232)。

第6章では、調査地でごく一般的に行われているサブ・グループ間での通婚を背景に、モンの女性たちが民族衣装をいかに選択してきたのかを検討している。モンにおける結婚後の居住は夫方居住であり、1970年代頃まで女性たちは嫁ぎ先のサブ・グループに合わせて、衣装を製作・着用していた。しかし、1980年代以降、製作・着用の容易さ、はき心地の良さから、モン・ジュア出身及びモン・スー出身の女性たちは、嫁ぎ先がモン・ジュアであるにもかかわらず、モン・スーのスカートを着用するようになった。さらに、市場ではいずれのサブ・グループの衣装にも属さない既製衣装が散見されるようになった。このように、とりわけ通婚が多いモン・スーとモン・ジュアの間に、衣装がサブ・グループのメルクマールとして機能することはほとんどなくなっている (p.255)。

以上、本書は、モンの事例から見えてくる変化し続ける民族衣装のあり方を、まず衣装そのものを詳細に分析することで、実証的に示している。また、民族衣装の製作の場（工場）や売買の場（定期市）において、モン自身が新しい衣装を生み出していく過程を明らかにするとともに、モン女性による装いをめぐる選択を、サブ・グループ間関係をはじめとした社会関係を踏まえて分析している。以上のことから終章では、モン女性たちは、その時々状況に応じた柔軟な選択、そして村落内における女性同士の連帯感とそこから逸脱しないことによって、装うという営みを変化させつつ維持してきたと指摘している (p.266)。

最後に、本書の内容を受けて新たに導かれた問いを述べる。まず、第3章と第4章で示された民族衣装の変化を、モン女性たちはどのように経験しているのだろうか。特に、本書の軸となる3世代にわたるモン女性の衣装の悉皆調査を踏まえて、この経験を世代別に考察することはできないだろ

うか。とりわけ、1990年代以降に見られる化繊布・刺繍テープ・レース等の流通、衣装の既製服化と商品化に伴う新しい衣装の創出を牽引しているのは、主に10～20歳代のモン女性であることが本書から読み取れる。日々洋服を身にまとう彼女たちにとって、民族衣装とは旧正月や婚礼で着用するハレ着であり (pp.203, 246, 263)、目新しくきれいな衣装を着ることが重要であることは頷ける。また、これに応ずるように、新しい色やデザインの既製服を製作するのをもまた、若年層のモン女性である (pp.179, 203)。

一方で、日常的に民族衣装を着ている20歳代以上の既婚女性にとって、もしくは新しい衣装を購入することが少ない老年女性 (pp.143, 147, 196) にとって、1990年代以降の衣装の変化とはいかなるものであり、また彼女たちはこの衣装の変化にどのように関与しているのだろうか。これらの問いにかかわるいくつかの事例を、本書はすでに示している。例えば、中年層の女性たちは、いまだ縫製と刺繍の工程を手作業で行っており、定期市でみかけたデザインを模して衣装を自作したり (pp.203-204)、デザインにこだわりのある娘から衣装の手直し・製作を依頼されたり (pp.148, 203, 246)、娘から着用しなくなった衣装を譲り受けたりするなど (pp.147-148)、衣装の変化を娘世代とは全く異なるかたちで経験している。これに加えて、日々衣装を着用している20歳代以上の既婚女性たちによって、着心地に基づいて衣装が選択されていること (pp.209-210, 249-251) も注目し値するのではないだろうか。以上のように、衣装を選択するにあたっての世代別の違いや世代間の相互作用に着目することは、本書 (pp.256-257) でも一部言及されているように、装いの規範をより詳しく検討する上で重要である。

これらの問いは、本書が提示する分析視角が魅力的であるゆえに導かれたものであることは言うまでもない。本書は、民族衣装をめぐる今後の研究に、装いの変化を捉える手法と視座を提示した点で、大変貴重な研究成果といえるのである。

(佐藤若菜・新潟国際情報大学国際学部)